

帰国報告

～ たかが 3 時間、されど 3 時間の補習授業校 ～

前 ポストン補習授業校 教頭

現 礼文町立船泊中学校 教諭 関谷 克志

1. はじめに

平成 16 年度から 3 年間、アメリカ・マサチューセッツ州にある「ポストン日本語学校」で、教頭として勤務した。

「日本人学校」ではなく、「日本語学校」である。日本政府の呼び名では「ポストン補習授業校」である。

では、「補習授業校」とは、どのような学校だろうか。「日本人学校」とはどのように違うのだろうか。

恥ずかしい話だが、私自身、派遣が決まるまで「補習授業校」の存在すら知らなかった。ましてや、教頭職を委嘱されるとは夢にも思っていなかった。

私が派遣された年度に限って言えば、総派遣者のうち、補習授業校に派遣された者はわずか 1 割程度であったように思う。補習授業校がそれほど有名でないのも、むべなるかなである。

多くの方々も、派遣前の私同様「補習授業校」について詳しくは知らないことと思う。そこで、3 年間の貴重な経験を基に、「補習授業校」の様子について紹介する。

ただし、一口に「補習授業校」と言っても、実情は千差万別である。本報告は、あくまでも私が勤務した「ポストン補習授業校について」のものであることをお断りしておく。

2. 日本人学校と補習授業校

世界には、日本政府が関与する「在外教育施設」が 300 弱あるが、大別して 3 種類に分けられる。

一つは「日本人学校(2006 年 4 月現在 85 校)」、一つは「私立在外教育施設(同 12 校)」、そして、もう一つが「補習授業校(同 187 校)」である。

北米地域には補習授業校が 83 校あり、世界の補習授業校の半数近くを占めている。その一方で、同地域にある日本人学校は、グアム校を含めてもわずか 4 校に過ぎない。これは、この地域が

- ・先進国であること
- ・比較的、治安がいいこと
- ・比較的、現地の教育が充実していること
- ・英語圏であること

が理由だと思われる。

日本人学校が、いわゆる「外国にある日本の学校」であるのに対して、補習授業校はその目的・性格・形態等がかなり異なっている。

一番の違いは、ほとんどの補習授業校が「週に一日しかない」ことである(学校によっては二日)。子どもたちは、月曜から金曜までは現地校に通い、土曜日(もしくは日曜日)だけ、補習授業校に通ってくる。そのため、教科や授業時数が限られており、どちらかという「学校」よりも「塾」に近い形態の補習授業校が多い。

したがって、日本政府からの補助は受けているものの、日本人学校のような公的な存在ではなく、卒業しても特に資格が与えられるわけではない。

また、大多数が自前の校舎を持たず、現地校を借用したり、日本人学校と共用したりしている。小さい補習授業校の中には、教会や商工会館等を借用している所もあり、多くの学校で「校舎の確保」が課題となっている。

補習授業校は週に一日しかないため、実際に

子どもの指導に携わる教員は、ほとんどが「現地採用教員」である。文部科学省からは、規模に応じて(100人以上1名・400人以上2名・以降400人増えるごとに1名)教員が派遣されるが、補習授業校ではいずれも「管理職」を委嘱され、原則として学級担任や教科担任になることはない。そのため、私のように「日本では教諭だが補習授業校では教頭」、あるいは「日本では教頭だが補習授業校では校長」という者もかなりの数に上る。

また、「補習授業校」という名称は日本政府側の一律な呼び名であり、現地では「日本語補習校」「日本語学校」等、それぞれの学校が別な名称を用いている。ボストン補習授業校は、和名「ボストン日本語学校」、英名「THE JAPANESE LANGUAGE SCHOOL OF GREATER BOSTON」が現地での正式名称である。

3．歴史と文化、そしてスポーツの町ボストン

松坂大輔投手の入団で一躍有名になったレッドソックスの本拠地ボストンは、ニューヨークの北東約360kmに位置する、マサチューセッツ州の州都である。

北海道開拓時代に、「青年よ大志を抱け」で有名なクラーク博士をはじめ、多くのマサチューセッツ出身者が道発展に寄与した関係で、マ州と北海道は姉妹州となっている。

ボストンは、近郊のレキシントンやコンコードとともにアメリカ発祥の地として有名で、史跡や往時を偲ばせる古い町並みを目的に訪れる観光客も多い。

また、ハーバード大学やマサチューセッツ工科大学といった日本でも著名な大学や、かつて小澤征爾氏が音楽監督を務めたボストン交響楽団、日本の浮世絵を数多く所蔵しているボストン美術館等がある、文化と学術の町である。

メジャーリーグをはじめとしたスポーツも盛んで、4大プロスポーツ(野球・アメリカンフットボール・バスケットボール・アイスホッケー

ー)のチームの本拠地となっている。毎年4月には、100年以上の歴史を有するボストンマラソンも行われる、全米屈指のスポーツの町でもある。

4．ボストン日本語学校

歴史

ボストン日本語学校は、ボストン及びその近郊に滞在する日本人、並びに日本に関心を持つ一般の子女に、日本語を教え、日本の文化に慣れ親しませる目的で、1975年6月に設立された。

ワシントンに世界初の補習授業校が開校(58年)してから17年、ニューヨーク・ニュージャージー(62年)、ハンブルグ(63年)、シカゴ(66年)、ラパス(ボリビア67年)、ロスアンジェルス・サンフランシスコ・フランクフルト(69年)等が続いて、世界で30数番目の開校である。

当初は「ボストン日本人会」による設立、運営であったが、現在は、日本人会の下部組織である「ボストン日本語学校運営委員会」が運営に当たっている。

借用校舎

開校時は、日本企業のオフィスが最初の校舎であり、開校式は企業の隣にあるホテルの会議用広間で行われた。しかし、まもなく「オフィスを使用するのは安全上好ましくない」という苦情が出て、やむなくマサチューセッツ工科大学を借用することになった。しかし「広すぎて迷子になる」という事件もあって、75年10月に、ボストン市街から車で約20分の閑静な住宅街にあるメドフォード高校に移転した。

以来30余年、関係者の努力とメドフォード市の理解によって、現在に至っている。

単一校舎を使用している補習授業校としては、世界最大規模の学校である(ロスアンジェルス4分校・ロンドン3分校)。

分校のある補習授業校に比べたら大変恵まれているが、それでも「借用校舎」であるが故の

悩みは尽きない。

数年前には「借用料3倍値上げ」の話が持ち上がり(幸い、関係者の努力で値上げ率をかなり抑えることができたが)、現在でも、「体育館を予約しておいたのに現地校の活動が入って使用できなくなった」「現地校が夏休みに入った途端、(我々はまだ授業があるのに)工事が始まり教室や職員室が使えなくなった」「現地校教員からの無理な注文や苦情(黒板消すな・机を動かすな・月曜日に登校したら物が壊されていたから弁償しろ etc.)」等、トラブルが日常茶飯事である。

園児・児童・生徒

開校時にわずか25名だった在籍数は、8年後に100名、9年後に200名、12年後に300名、14年後に400名、20年後に500名、25年後に600名を突破し、平成18年4月には700名に達した。

これは、世界180余校の補習授業校の中で、ロスアンジェルス(約1600名)、ロンドン(約1300名)、サンフランシスコ(約1200名)、デトロイト(約1000名)、ニューヨーク(約800名)に次ぎ、シカゴと並んで6番目の規模である。

多くの日本人学校及び補習授業校で在籍数が減少している中であって、ボストン校は着実に増え続けている。これは、駐在員の子女が比較的少なく日本の景気の影響を受けづらいこと、永住や国際結婚家庭の子女が増えていることが原因である。

在籍者は、ボストン市内在住者は少なく、多くが「グレーターボストン」と呼ばれる近郊の町からの通学者である。また、他州から通ってくる子どももかなりの数に上り、中には、片道2時間以上かけて登校してくる子どももいる。

教職員

派遣教員2名(校長・教頭)、現地採用教員(学級担任)40名弱、事務職員4名(うち非常勤1名)、図書館事務職員2名の約50名体制である。

現地採用教員及び事務職員は、本校ホームページや現地情報誌で募集し、運営委員及び管理職による面接試験を経て採用している。

現地採用教員は、教材準備等で平日に事務所に来所する者もいるが、基本的には土曜日みの勤務である。そのため、平日はフルタイムの職についている者も多く、1名を除いて全員が女性である。

「本職の都合」や「配偶者の転勤」等によって退職する者が多く、1年で半数近くの教員が入れ替わった時もある。「教員の安定的な確保」も、本校の大きな課題である。

一方、事務職員は、火曜から金曜まではアパートの一部を借りた「事務所」勤務である。経理・在籍管理・物品発注・印刷・PC管理等、4名で分担して作業をしている。土曜日は学校勤務となり、保健室常駐、現地校との折衝、事務等を行っている。

学級担任が行う「子どもたちへの直接的な指導」、及び、事務職員が行う「学校事務の一部」、これらを除くその他全ての業務が、管理職(校長・教頭)の仕事である。通常の「管理職業務(学校運営全般、文部科学省への報告や各関係機関との連携等)」+「各分掌(教務・生徒指導・研修等)部長の業務」+「その他雑用(公務補のような)」、そんなイメージである。

事務職員同様、火～金は事務所で一日中机に向かったの仕事になる。「PCで、各報告や提案文書作り」「電話やEメールで、教員への助言、指導」「学校行事の準備」「運営委員会やPTA等、関係機関との連絡、調整」「入学希望者との面接、保護者や来訪者への対応」等が主な業務である。

学級編成と教育課程

幼稚部・小学部・中学部・高校部・日本語部(日本語を外国語として学ぶ学部)の5学部を有している。ちなみに、5学部を有するのは世界の補習授業校のうち、わずか20校弱である。

「学級編成」は、日本語部を除いて、「能力別」ではなく「均質編成」を原則としている。

幼稚部は、3・4・5歳児各3クラス、計9クラス編成であるが、近年、非常に人気が高く、常に数十名がウェイティング状態となっている。「学級増」を望む保護者も多いが、先述の「教室確保」「教員確保」の面で、なかなか要望に応えることができない状況である。

小学部は各学年2,3クラス、中学部は各学年1,2クラス、ともに各クラス20名前後となっている。学力差、特に「日本語力の差」が激しく、休み時間の廊下では（英語使用不可の指導をしているのにもかかわらず）日本語以上に英語が多く飛び交っている。

高校部は各学年1クラス編成である。ただし、現地校の入学時期（9月）の関係で、高校3年生のクラスは設けていない。希望者のみ聴講生として2年生と一緒に受講している。

日本語部は、11歳以下は年齢別2クラス、12歳以上は能力別3クラスの編成になっている。もともとは「現地の子どもに日本語を教える」趣旨で設置された部であるが、近年、「普通部では、日本語力に難がありついていくのが難しい子」や「第二外国語として日本語を学ぶアジア系の子」が多くなっている。

派遣教員は原則として「義務教育以外に関与してはならない」ことになっているが、学校行事や職員会議等、全校規模で行う活動が多いため、その線引きは非常に難しいものがある。

授業は、各50分が3コマ、即ち、土曜日午前中3時間のみとなっている。多くの補習授業校は午後も授業を行っているが、ボストン校は保護者のニーズも弱く、開校以来ずっと午前授業である。

幼稚部は、日本の「幼稚園教育要領」に則り、工作や歌唱等、日本の幼稚園と同じような指導を行っている。ただ、「日本語学校」であるため、言葉の指導を重視し、日常生活の中で、言葉への興味や関心を育て、喜んで話したり、聞いたりする態度や言葉に対する感覚を養うようにしている。

小学部・中学部は、国語2時間、算数（数学）

1時間である。日本と同じ教科書を使用しているが、授業時数の関係上、両教科とも日本の学校と同程度の内容を扱うことは困難であり、教材を精選の上重点指導を行っている。

高校部は、現代国語1時間、日本史1時間が必修、もう1時間は数学・古典の選択となっている。中学部・高校部とも教科担任制をとっている。

日本語部は、独自のカリキュラムに従って指導を行っている。

保護者

保護者の日本語学校への期待や要求は様々であるが、大別すると3つに分けられる。

一つは、「帰国後に困らない程度の学力をつけ、スムーズに適応してほしい。」という願いである。主として4~5年、あるいはそれ以上滞在して帰国予定の人たちの要望である。日本の授業内容についていくことができ、かつ、高校、大学へ支障なく進学できる学力を望むものである。小学高学年から中学校にかけて在籍する者に多い。

一つは、「日本語に接し、少しでもよいから習得してほしい。」という願いである。永住者、国際結婚家庭の子女の多くがこれに相当する。英語が第一言語で、日本語を第二言語とする子どもに対し、親（特に母親）は自分の母国語を覚えて欲しいと願うものである。

一つは、「日本の友だちに接し、日本語で話ができ、楽しめる場であってほしい。」という願いである。1~2年程度の短期滞在の人たちの要望で、子どもにはできるだけ早く英語を身につけ、アメリカの学校で困らないようになってもらいたいと願い、日本語学校は週1回、日本の友だちと会える楽しみの場と考えているものである。比較的低年齢の子どもに多い。

このうち、中者（日本語を第二言語とする子ども）が増加傾向にあるのが、ボストン校の特徴である。

ほとんどの保護者は、学校運営に対して非常に協力的である。各種のボランティア活動や

PTA 主催の講座・行事等も盛んで、年 2 回行われる「PTA 文化祭」は、日本の高校や大学の学校祭を髣髴とさせる雰囲気である。本校が「保護者立ポストン日本語学校」と言われている所以である。

5. たかが 3 時間、されど 3 時間

毎週が行事日

たかが週 3 時間...形態は「塾」に近いものの、されど 3 時間...日本語学校も「学校」である以上、「日本の学校文化」を教えることも大切な使命である。そして、ほとんどの保護者の強い希望でもある。

そこで、可能な限り、日本と同じような行事を実施するよう努めている。

入学式や卒業式はもちろん、避難訓練・クラス写真撮影・授業参観・学級懇談会・大運動会・体育的行事・夏休み作品コンクール・幼稚部運動会・秋祭り・お遊戯会・文化的行事等、日本でおなじみの行事を実施している。

しかし、授業日はわずか週一日（年間授業日数 41 日）。結果、毎週が行事日といった感じになる。

前日、現地校終了後に学校に行って会場設営。当日は、在校生対象の始業式を行った後、小学部以上の入学式。終了後、記念写真撮影と並行して会場衣替え。幼稚部入園式を終えた後、会場片づけをして職員会議...ポストン日本語学校はこうした慌しさの中スタートする。そして、1 年間ずっとこの調子である。

また、並行して行事を行うこともあり、「校長はこちらの行事、教頭はあちらの行事」と、始業から終業まで校長と一度も顔を合わせない日もある。授業日は昼食を取り損ねることも茶飯事である。

日本語学校の日

毎日が行事日の日本語学校であるが、仮に行事が何もない日でも、その慌しさはさして変わ

らない。

以下、日本語学校の一般的な一日を点描する。

冬はまだ薄暗い朝 7 時半、日本語学校の日が始まる。始業までわずか 1 時間半しかない。

「鍵はちゃんと開いているか、いつもと変わったところはないか。」全ての教室、トイレを見回る。職員室、保健室、事務室も改装(?)、あわてて開業準備をしなければならない。「今日、テレビを使うのは、この学級とあの学級。」テレビや OHP を倉庫から運び出すのもこの時間だ。

教員も、続々と出勤してくる。図書館に置いてあるカート（教材をすべてこれに収納している）を教室に運ぶ幼稚部教員。赤ペンのびっしり入った子どもの作文を廊下に掲示する小学部教員。宿題プリントをコピーするために朝早くから来ているのは、中学部の教員だろうか。その日の授業で使う教材を倉庫に取りに行く、日本語部の教員もいる。教室準備・授業準備に追われる校舎内は、さながら戦場のようだ。

8 時 40 分、教職員が職員朝会を始める頃、子どもたちが登校して来る。2 時間以上かけて来る子の眠そうな顔も、友だちの声を聞けばたちまち輝くばかりに。どの子も 1 週間ぶりの再会に笑顔がはじける。

9 時過ぎ、子どもたちの登校も終わり（遅刻してばつの悪そうな顔で急いでいる子どももちらほらいるが）廊下は静けさを取り戻す。教室から聞こえてくる子どもたちの元気な声を、廊下にいるボランティアの保護者が笑顔で聞いている。授業中トイレに行きたくなった子等、いざという時に備えて待機しているのだ。

この時間、一番にぎやかなのは保護者控え室になっている 2 階カフェテリアだ。PTA がやっているコーヒーベイクで購入したお菓子を片手に、「子どもの教育」「現地校の様子」等々、情報交換に話の花が咲く。違う控え室でパソコン相手に仕事をしている方、事務室に授業料を納めに行く方、掲示板で情報を収集している方、保護者もいろいろと忙しい様子だ。空き教室では、各種会議や PTA 主催講座等も行われている。

管理職ものんびりしている暇はない。研修授業の参観、運営委員会やPTAの会議への参加、現地校との交渉等、やることはたくさんある。子どものけがや保護者からの苦情等、非常の事態が生じると、もうパニック状態だ。スケジュールノートを手手に、トランシーバーをもう一方の手に、校舎内を右往左往することになる。

さあ、待ちに待った休み時間だ。子どもたちは、我先に、体育館に、中庭に、図書館に、思い思いの場所に急ぐ。わずか10分、20分の休み時間にかかる子どもたちの思いは、まさに「執念」だ。「休み時間があるから学校に来ている」、そう豪語する子もいる。そんな子どもたちを、安全パトロール委員や図書委員のボランティア保護者がやさしく見守っている。

一方、幼稚部園児の一番のお楽しみは「スナックタイム」。家から持ってきたお菓子や果物を口いっぱい頬張る。中には「朝食の代わり？」と思うような、豪華なお弁当を持ってくる子もいる。

そして、12時。お迎えの保護者に手を引かれて、子どもたちは家路につく。勉強が終わった解放感、また一週間友だちと会えない寂しさ、心中去来する思いは様々だ。

子どもが帰った後の校舎は、ひっそり。その分逆に「週一日、たった3時間とは思えない内容ぎっしり、充実した半日」であることをしみじみと感じる。

しかし、教職員の勤務はこれで終わりではない。職員会議や研修会等、午後も大切な業務が待っている。

すべてを終了し、事務所に引き上げるために教頭車に荷物を積み込む頃は、大抵もう夕方である。

一つのミスが命取り

「たかが3時間しかない」分、逆に、一日一日の授業日、一時間一時間の授業、一つ一つの取り組みがとても大切になる。子どもにとっても保護者にとっても、大切な「されど3時間」

なのである。

そのため、普通の学校だったらどうってことない小さなミスが、補習授業校では命取りになることも珍しくない。

たとえば「宿題や通信を配り忘れた」場合。日本なら翌日配るか、緊急なら教師が家庭に届けることも可能である。しかし、補習授業校の場合、「翌日＝翌週」である。校区(?)も広範囲に渡るので、届けることもできない。そこで、多くの教員は、連絡網で謝罪の上、全戸に郵送という形をとっている。大変な手間であるが、ここらあたりを怠ると確実に保護者から苦情が届くことになる。

たとえば「視聴覚機材や教材の準備」。借用校舎のため、現地校の機材や教材は一切使用できない。テレビ等の視聴覚機材は、その都度倉庫から教室に運ばなければならない。拡声器や液晶プロジェクター、ビデオテープ等は事務所からの運搬である。教員に予め予約してもらい、事務局(管理職と事務職員)で準備することになっているが、万が一忘れようものなら「授業ができない。」とお叱りを受けることになる。また、片付け忘れて現地校に置いてこようものなら、無くなる事は必至である。

たとえば「教職員間の連携」。学校が「組織」として機能するためには、全員が情報を共有し、共通理解に立って動くことが必要である。「1組では許されているのに2組では許されていない。」「学級の諸問題を管理職が把握していなかった。」、このような事態が生じれば、保護者の信用を一気に失うことになる。俗に言う「報・連・相」の重要性である。ところが、補習授業校の場合、教職員が顔を合わせるのは授業日だけ。それも「朝の会10分程度」「帰りの会10分程度」「月に一度の職員会議」くらいである。何年も勤務しているのに、お互いに名前を知らない教員同士もいる。「ちょっと気になることを炉辺談話で。」「気がついたこと、思い出したことをその時に。」とは、なかなかならない。結果、「聞いてないよ。」「忘れちゃった。」「言った。

言わない。」となりがちである。「大切なこと」あるいは「大切かどうか分からないけどちょっと気になること」は、できるだけ早く、何度も何度も、具体的に、伝える、確認することが必要である。「まあいいや。なんとかなるだろう。」では、後で10倍大変になるのが普通である。

そして、何よりも気をつけなければならないのが、「教員欠勤時の代理講師手配」である。教員にはできるだけ「欠勤」しないようお願いしているが、それでもやむを得ない場合もある。その場合、週に一日しかない授業日なので、「自習にする」「学年で面倒を見合う」ということはせず、「代理講師」を入れるようにしている。これを忘れてたり、手違いがあったりすれば、その学級は、その日一日「空白」になってしまう。そうならないよう、欠勤を希望する教員は2週間前までに届け出るよう義務付けているが、それでも授業日の朝、急に体調が悪くなることもある。そんな時は、代理講師名簿片手に、片っ端から電話をかけることになる。年に一度くらいは、そんなパニックの朝がある。

日本よりも日本らしく

先述のように、「教科」だけでなく、「日本の文化」を教えることも日本語学校の大切な使命である。特に、海外にある学校である分だけ、「日本の」を強調した取り組みを重視している。

初めて接する子どもの中には、「???」と戸惑いを見せる子どももいるが、保護者には「懐かしい」「楽しい」「有意義である」と大変好評である。

以下、日本語学校の中の「日本」をいくつか紹介する。

4月、「入園式・入学式」が行われる。側面に紅白幕、正面に日章旗がはられた会場に、君が代が肅々と流れる。米国の国旗と国歌を除けば、昔ながらの日本の入学式そのものである。

5月、小学部以上の「大運動会」がある。万国旗がはためく中、「ラジオ体操」を皮切りに、「徒競走」「玉入れ」「綱引き」「障害物競走」と、

定番の競技が続く。「生徒による係運営」「PTA参加種目」「家族そろってのお弁当」等、「学校週五日制」の影響で簡略化が進む日本の学校の運動会よりも、ある意味「日本の運動会」らしいかもしれない。

2学期は「始業式」から始まる。一年でただ一度、全校700人が一堂に会する機会だ。「校長先生のお話」に、「2学期がんばるぞ。」と意欲を持つ子がいる一方で、現地校しか知らない子どもの中には「何でぼくはここにいるんだろう？校長先生はいったい何をやっているんだろう？」と、「始業式」の意味がよくわかっていない子もいる。

9月、子どもたちが楽しみにしている「体育的行事」がある。「ポートボール」や「ドッジボール」等、学年・学級対抗の球技大会だ。この時ばかりは、漢字も九九も忘れて（このあたりも日本の子どもと一緒にである）、必死でボールを追いかける。勝っても負けてもクラスの団結力が高まる行事だ。

10月は「幼稚部秋祭り」。子どもたちが、手作りのおみこしをかついで、中庭を練り歩く。はっぴ姿やねじりハチマキの子もいて、みんなすっかり「お祭り気分」。一番初めに、「日本のお祭りの様子をビデオで見せて、雰囲気味わわせた」ことが功を奏したのだろう。

3学期には、「文化的行事」がある。「かるたとり」「書き初め大会」「百人一首大会」等、日本のお正月らしい風景が繰り広げられる。一方、日本語部は、一年間の学習成果を「発表会」で披露する。日本の童謡の合唱や、「浦島太郎」の劇等、楽しい出し物の後は、お寿司でパーティーだ。

そして3月、入学式同様、厳粛な（日本的な）雰囲気で行われる卒業式で、1年の幕を閉じる。

日本語学校の中の「日本」は、特別な行事だけとは限らない。毎日の学校生活も大切な「日本の（学校）文化」を伝える場だ。例えば「朝、帰りの挨拶（起立・気をつけ・礼）」、例えば「朝の会（ホームルーム）」、例えば「日直」。一方、

「指名されたら返事をして起立」校内でのアメ、ガム禁止」授業中はなるべく水を飲まない」等、日本では当たり前(?)のことがなかなか徹底されないのが悩みだ。

また、学校内に併設されている「日本語図書館」もボストン校自慢の「日本」だ。一万五千冊を超える蔵書を誇り、図書館長、図書委員、図書館事務職員の手で運営されている。子ども・保護者以外にも開放しているため、いつ行ってもたくさんの人でにぎわっている。

最後に、私のお気に入りの「日本」を紹介する。毎月行われる「幼稚部お誕生会」。日本でもアメリカでも定番の「HAPPY BIRTHDAY」の歌を歌う。おなじみの「ハッピーバースデー トューユー ...」という歌だ。しかし、日本語学校では、これを「おめでとう おたんじょうびー ...」と日本語で歌うのだ。長年日本で暮らしている私だが、この歌の日本語版は、日本語学校で聞いたのが初めてである(そして、最後でもある)。

6. 学力差(日本語力の差)克服を目指して

多様化する子どもたち

「学力差」は日本の学校同様、日本語学校でも大きな課題である。とりわけ在外教育施設の場合、「日本語力の差」が大きい分、問題はより深刻である。

ボストン校では、入学時に日本語による簡単な面接を行ってはいるが、それでも「教師の指示を理解できない」「日本語学校ではほとんど話をしない(できない?)」子が、クラスに数名いる。この傾向は、先述のように「日本語を第二言語とする子ども」が増えているため、年を経るにしたがって顕著になってきている。

また、「学力」面だけでなく、「モチベーション」の点でも、年々多様化(低下)が進んでいる。

先に「保護者の期待、要望の違い」について書いたが、当然、親の願いや思いは子どもたちの意欲、意識に反映される。

「補習授業校」を語る時に「魔の金曜日」という言葉がよく使われる。補習授業校は土曜日だけ、必然、「不足分は家庭学習(宿題)で補う」ことが必要となる。しかし、現地校が忙しく、どうしても補習授業校の宿題は後回し。結果、授業前日の金曜日に、夜遅くまでかかってやることになる。これが「魔の金曜日」の意である。

しかし、少なくともボストン校に関する限り、そこまで必死になって頑張る子どもは年々少なくなっている。

平気で宿題を忘れてくる低学年(確信犯?)、漢字テストがあることを知っているのに全く勉強してこない高学年、休み時間のドッジボールと友人に会えることだけを楽しみに登校してくる中学生、「日本語学校を卒業すると大学受験で有利になるから、そのためだけに来ている。」と平気で口にする高校生、そんな子どもが確実に増えている。

保護者にも「家庭は第二の学校、保護者は第二の教師」と協力をお願いしているが、反応は年々鈍くなってきている。

ボランティア活動等には非常に熱心でも、我が子の(日本語)教育に対しては、それほどではない保護者も少なくない。

「帰国する予定はないので、楽しく学校に行ってくればそれでいいんです。もっとのんびりやって下さい。」「人(特に同じ日本人)とのふれあいが勉強以上に大切です。勉強はほどほどでいいから、もっと楽しい行事を増やして下さい。」「そういう思いの保護者が増えてきている。

そのどれもが、「誤った考え」とは言えないし、否定すべきものでもない。しかし、このような状況の中、日本の教科書を使って授業作りを進めなければならない教員の苦労は、並大抵のものではない。

更には、こういう保護者ばかりではなく、少数になりつつあるとはいえ、帰国を控え「受験」を懸念している保護者もいる。そういう保護者からは、「もっと厳しく指導してほしい。宿題も増やしてほしい。」「午後も授業をやってほしい。」

理科や社会も教えてほしい。」という正反対な要望もあるだけに、学校運営や授業作りの難しさは一入である。

厳しい状況だからこそ

多様化する子どもたち、そして保護者に対応する学校づくりをするためには、「能力別学級編成」や「学級定員の見直し」等も視野に入れた組織・体制等、運営面（ハード面）での検討、改善が必要である。ポストン校でも、運営委員会が中心となって、5年後、10年後を見据えた学校づくりの検討が進められている。予算・校舎・教職員の確保等、制約や障壁も大きいが、子どもと保護者のニーズに、より応えられる学校を目指して、精力的に検討が行われている。

しかし、子どもの多様化に対応するためには、運営面（ハード面）だけでなく、「授業作りの工夫」「教師の力量向上」等、ソフト面での努力、工夫が絶対に必要である。

「日本語が分からない子が増えているから授業にならない。能力別編成やTT指導、学級定員減を検討してほしい。あるいは、試験をやって一定の日本語力を有さない子どもは入学させないようしてほしい。」という思いの教員も多い。

もっともな思いであり、運営委員会も貴重な意見として真摯に受け止めてくれている。

しかし、「だから授業にならないのも仕方ない。」で終わっては、元も子もない。「状況は厳しい。でも、だからこそ努力、工夫して、子どもたちに力をつけていこう。そのためにがんばろう。」という意識は、本校及び補習授業校だけでなく、教壇に立つすべての教師にとって必要なものである。この意識や気概がなければ、どんなに運営面を改善しても効果は全く上がらない。

教頭として勤務した3年間、教員に一番お願いし、要求し続けたことがこのことである。

「全員参加」の授業づくり

「学力差（日本語力の差）がある子どもたち

に対応する授業を作るためには、どうしたらいいのか」とこの課題に対してポストン校が立てた方針（のキーワード）が「全員参加」である。

「はじめから全員理解を求めるから、無理や諦めも生じる。とりあえず、全員が参加できる授業を目指そう。参加できなければ理解も何もない。特に言語は、はじめは理解できなくても参加（活動）している中で、徐々に理解できるようになるものだ。」という考えである。

3年間、ことあるごとに「全員参加の大切さ」を訴え、教員に求め続けた。結果、私が帰国する頃には、「学校評価」をはじめ「研修授業反省会」「お互いの授業を見合っのレポート」等、いたるところで「全員参加」という言葉が聞かれるようになった。

「全員参加を目指す授業作りの具体的な工夫」についての詳述は避けるが、以下、どのように教員間に「全員参加の授業づくり」を浸透させようと試みたのか、簡単に紹介する。

模擬授業でイメージを持たせる

「全員参加の授業を目指す」大切さはわかっていても、すぐに実践できるわけでないのは当たり前である。

特に、学級担任全てが「現地採用教員」である本校の場合はなおさらである。

40名弱いる現地採用教員の中で、日本や補習授業校での教員経験がある者、もしくは教員免許を有している者は、三分の一にも満たない。また、先述のように入れ替わりが激しく、半数以上の教員が本校勤務3年以内である。

初任者には、「事務所で事前研修2時間」「事前授業参観2日」「授業公開及び授業反省会2回」を義務付けてはいるが、当然、これだけでは不十分である。

また、全ての教員を対象にした「実践交流会（お互いの実践を交流し学びあう会）」や「研修授業（お互いの授業を見合う）」、「部ごとの研修」等も行っているが、多くの教員の授業は「昔ながらの教師主導。教師がひたすら説明し、子ども

もは聞いているだけ。時々、一問一答のやり取りがあるだけ」というものであった。圧倒的に「人の授業を見る」機会が少なく、自分自身が生徒として教わった経験だけを頼りに、授業作りを進めているせいである。

これでは「全員参加の授業」は、夢のまた夢である。全員参加の授業の「イメージを描く」ことすら出来ないからである。

いくら「全員参加の大切さ」を声高に訴えても、目標とする授業のイメージが持てないようでは、その必要性も感じてもらえない。授業反省会等で「子どもが参加できていない」ことを指摘しても、「日本の学校と一緒にしないでほしい。」「時数に限りがあるのだから無理。」「中学生や高校生には馴染まない。」と、聞き流されることも多かった。

そこで、百聞は一見にしかず、教員相手の模擬授業をやらせてもらうことにした。

わずか30分、場所は職員室として使用しているカフェテリア(黒板なし、生徒役の教員は昼食を取りながら)という厳しい条件であったが、幼稚部から日本語部までの全教員を相手に「漢字指導」の授業をやらせてもらった。

幸いにも「全員参加のイメージがつかめた。」「教頭が言わんとしていることがわかった。」と好評で、2年目は「国語と算数」、3年目は「分数」「漢詩」と、計4回教員相手の模擬授業をやらせてもらうことができた。

回を重ねるごとに、「全員参加」のイメージが共有化されていったように思う。教員間での話題に上ることも多くなり、自分の授業作りに取り入れようと努力する教員も増えていった。

そして、既に帰国が決まっていた3年目の3学期には、「やはり、子ども相手の授業を見せてほしい。」という要望を受けて、計11クラス、9時間、子ども相手の授業をやらせてもらった。年中4歳児のクラスから日本語部のクラスまで、年齢も教科もバラバラであったが、テーマはいずれも「全員参加を目指して」である。

もちろん、思惑通りにはいかない授業ばかり

であったが、それでも、参観してくれた教員すべてに「とても参考になった。」「自分の授業でも取り入れていきたい。」と言ってもらうことができた(多分に社交辞令ではあるが)。

模擬授業後まもなく帰国となったので、その後の様子は把握していない。しかし、ボストン校の教員は、非常に熱心で意欲あふれる者ばかりである。必要性を感じれば、努力を惜しまない。子どもの成長を願い、一生懸命「全員参加の授業作り」を進めてくれていることを確信している。

7. おわりに

帰国してからまだ数ヶ月である。しかし、補習授業校での勤務は、はるか昔のこのようである。あるいは、夢物語のようである。

ボストンに派遣された時も同じように「日本で教壇に立っていたのが何十年も前のよう」に感じた。

それだけ、補習授業校での勤務は、日本での勤務とは異なっていた。毎日子どもと遊び、授業作りに熱中していた私にとって、PC相手の毎日は当惑だらけであった。「教諭」と「教頭」という違いもあるだろうが、「これが教師の仕事なのだろうか」と寂しく思ったこともある。

しかし、3年の任期を終え帰国した今、自信を持って次のように言うことができる。「国は違っても、仕事の内容は違っても、日本で頑張っていたこと、日本でつけた力は、必ず通用する。」

同時に、次のようにも確信している。「補習授業校に勤務することはもうないかもしれない。でも、補習授業校で勉強させてもらったことは、決して無駄ではない。」

貴重な経験を与えていただいたこと、ボストンでお世話になった全ての人々に、深く深く感謝している。

せめてもの恩返しとして、3年間の貴重な経験をいかし、北海道の子どもたちの成長のために、今後も精進していきたいと思う。